

【研究ノート】

ロミン・ヒッチコックが 1888 年に撮影した北海道と色丹島の写真と旅程

宇仁義和

はじめに

ロミン・ヒッチコック Romyn Hitchcock 1851-1923 はアメリカの化学者・文化人類学者で、スミソニアン協会 Smithsonian Institution に在職中の1887年(明治20)に大阪に赴任、当時は大阪にあった第三高等中学校の英語教授に就任した。翌1888年は日本を訪問した米国籍の日食調査に参加、そして北海道と色丹島で民族調査を実施するなど日本でフィールドワークを行った研究者である。日本滞在はわずか2年であったが、北海道では坪井正五郎とおなじ年に、坪井とは異なる北海道東部でアイヌの民族学的調査を行う一方、関西では古墳を調査しており、英国人ガーランド William Gowland とならび最初期の古墳の学術調査と写真を残したことで高く評価されている(上田編 2006)。

彼のアイヌに関する調査は、色丹島での調査報告が“The Ancient Pit-dwellers of Yezo”(Hitchcock 1891a)、北海道での調査報告は“The Ainous of Yezo, Japan”(Hitchcock 1891b)としてスミソニアン協会の学術雑誌に掲載され、同時代の研究者には知られるところとなり、報告書の刊行から約1世紀後に北構保男氏の翻訳によって『アイヌ人とその文化』(六興出版 1985)として出版された。この間、1981年(昭和56)に北海道開拓記念館の学芸員であった関秀志氏がプリントの一部を複写し資料を紹介(関 1984)、その後も1990年(平成2)に同館の出利葉浩司学芸員がプリントを複写、うち1枚が同館で常設展示された。ヒッチコックの訪問地では、2005年に斜里町立知床博物館がプリントを購入し、斜里での撮影とされた5枚を常設展示していた(現在は1枚のみ)。さらに近年はコーネル大学に保管されている講演原稿が和訳されている(矢口・出利葉 2009)。

このようにヒッチコックは1888年という早い年代に写真を使用してアイヌ文化を報告したことで、この分野における先行研究として研究者の関心を引き続けている。しかしながら、報告書やその翻訳では彼の北海道での詳しい旅程は記述されておらず、写真も不鮮明な品質であるため、被写体に関する写真の説明が理解困難なものも見受けられる。そして保存された写真の全体像は未報告のままとなっている。

本論では、スミソニアン協会国立人類学アーカイブ National Anthropological Archive (NAA) に保存されているヒッチコックが撮影した北海道と色丹島の写真について、オリジナルプリントを観察し、撮影場所を特定すること、出版物の写真では不明であった被写体の内容を明かとすることを目的とした。また、コーネル大学附属図書館稀観書手稿室 Division of Rare and Manuscript Collections at Cornell University に保管された講演原稿や旅行記を用い、彼の旅程を可能な限り再現するものである。

なお、本論では Hitchcock (1891a, 1891b) およびその翻訳であるヒッチコック (1985) の両方を報告書と記している。また、引用文中への宇仁による注記は [] で、ネガ番号は # で示した。

資料と方法

本論で用いた資料は、コーネル大学附属図書館に保管されている講演原稿や旅行記など

のヒッチコックが記した文書類、そしてスミソニアン協会国立人類学アーカイブに保存されているヒッチコックが撮影した北海道と色丹島の写真を基礎に、北海道東部での現地調査や聞き取りなどを補助的に用いた。

- ・コーネル大学附属図書館の文書類

ヒッチコックの手稿や新聞切り抜きなどの文書類は、ニューヨーク州北部のイサカ Ithaca にあるコーネル大学附属図書館稀観書手稿室に収蔵されている。請求記号は〈Romyn Hitchcock papers, 1841-1900, 1882-1900 (bulk) Collection Number 2174〉である。

このうち本論で用いたものは、アイヌに関する講演原稿 *Lecture on Ainos of Yezo*—typed、北海道の旅行記 *Descriptions on his travels in Yezo*（以下「旅行記」と記す）、そして手書きの地図 *Map of Hokkaido in hand drawing* などである。

調査は2014年1月23日に著者1人で実施、閲覧したすべての資料をデジタル一眼レフカメラ Nikon D5100 + MicroNikkor 40mm で撮影を行った。撮影方法は手持ち、絞り F8、照明は天井から蛍光灯のみである。

- ・スミソニアン協会国立人類学アーカイブの写真

同アーカイブは、ワシントンDC郊外のメリーランド州にある博物館支援センター Museum Support Center (MSC) に置かれている。実見したのはヒッチコックが撮影した写真のプリント類である。資料の請求記号は〈Romyn Hitchcock photographs of Ainu people, Japan, and Korea, circa 1885-1895 NAA Photo Lot 77-38, National Anthropological Archives〉である。プリントのサイズは、おおむね12×20cmまたは16×23cmと大型であった。調査は2014年1月28日に著者1人で実施、プリント全部をデジタル一眼レフカメラ Nikon D5100 + MicroNikkor 40mm で撮影した。撮影方法は手持ち、絞り F8、照明は天井から蛍光灯のみである。本論では液晶モニター、つまり透過光を用いて、適宜レタッチも行ない観察した。

プリントに直接あるいは台紙に記入された記載事項はばらつきが見られたが、撮影場所 locality、資料番号 NAA INV、ネガ番号 OPPTS NEG、報告書 (Hitchcock 1891a/b) の図版番号 plate no., そして整理番号 reference no. であった。整理番号とは、報告書にも現れる2桁または3桁の番号で、矢口・出利葉 (2009: 127) の指摘のとおり、講演会で用いるスライドのための番号と考える。

なお、撮影場所や整理番号について、プリントに記載が無い場合や疑問符付きのものは、報告書の記述、被写体や背景を比較観察することで判断した。このように判断した撮影場所や整理番号には * (アスタリスク) を与えた。

結果

- ・コーネル大学附属図書館の文書類

旅行記は、旅程を記した青色の厚紙によって区分されていた。その区分は 1) Betsukai to Shibetsu [別海から標津]、2) Shibetsu to Shari [標津から斜里]、3) Yambets to Kushiro IwoSan [止別から釧路硫黄山]、4) Kushiro to Horoidzumi [釧路から幌泉] の4つであった。根室から色丹島や択捉島そして別海を出発する前日まで、斜里に到着した翌日から網走での滞在、常呂への訪問といった調査中の記述、写真に関する記述は見からなかった。手書きの地図には、調査経路や撮影場所の記入は見られなかった。

保存部分の旅行記は道中の道路や景観、宿泊所、林業の記述は詳しいものの、日付の記

入はわずかで、標津発8月16日、瑠辺斯発8月17日、白糠発8月30日、大津は8月31日停滞9月1日発とする計4か所のみが認められた。

・スミソニアン協会国立人類学アーカイブの写真

国立人類学アーカイブで閲覧複写した北海道と色丹島の現地写真の写真プリントは66点で、重複を除いたイメージは、根室1点、色丹島7点、別海3点、斜里5点、網走14点、常呂7点の計37点であった（表1）。同一イメージの判断は被写体の観察によった。被写体は建物と人物が多かったが、網走では人物が主体で建物を主題にしたものはなく、代わりに後述の移転直後のアイヌ集落と和人市街地が見られた。また、別海では、建物とともに写る和人、アイヌ家屋内部の写真に女性や子どもとともに写る和人の姿があった。逆に、報告書に収録された現地写真のうち、見つからなかったものが、ヒッチコック（1985）の図版31「箆を編むアイヌ婦人」（117p）、図版40「アイノ人の熊檻（斜里）」（145p）の2点であった。これらは報告書巻末の写真解説に記載がなく、撮影者が誰なのか不明である。

プリント用紙には albumen, cyanotype, silver gelatin (copy print), halftone 4種類が見られた。albumenは鶏卵紙で、多くは資料番号があり、一部には筆跡からヒッチコック自身と考えられる書き込みが見られた。cyanotypeは「青焼き」で紙質が悪く画像も不明瞭で、古い

表1. アメリカ国立人類学アーカイブに収蔵されているR. ヒッチコックが1888年に北海道と色丹島で撮影した写真
Table 1. Photos by R. Hitchcock in Hokkaido and Shikotan in 1888, collection of National Anthropological Archives

Ref. No.	Neg No.	Collection No.	Locality	Hitchcock 1985	Hitchcock 1891a/b	Note
58	uk	USNM047473.00	Nemuro 根室	pl. 2	LXXIV	色丹島と誤記 locality mistyped Shikotan Is.
771*	28823	cyanotype, USNM047474.00	Shikotan Is. 色丹島	pl. 3	LXXV	
57	uk	USNM052905.00	Shikotan Is. 色丹島	pl. 4	LXXVI	fig. I.4 in Fitzhugh 1999
772*	28821	cyanotype, USNM047475.00	Shikotan Is. 色丹島	pl. 5	LXXVII	
65*	uk	USNM047476.00	Shikotan Is. 色丹島	pl. 6	LXXVIII	
66	uk	USNM052906.00	Shikotan Is. 色丹島	pl. 7	LXXIX	
56*	uk	USNM047477.00	Shikotan Is. 色丹島	pl. 8	LXXX	
770*	28827	cyanotype	Shikotan Is. 色丹島	none	none	
740	28768	cyanotype, USNM047493.00	Betsukai 別海	pl. 27	C	
741	28834	cyanotype, USNM047494.00	Betsukai 別海	pl. 28	CI	
220*	28767	cyanotype, NAA INV 05282800	Betsukai 別海	none	none	original image of pl. CIII 図版30の元写真
742*	28838	cyanotype, fileprint=USNM047537.00	Shari 斜里	none	none	
743	28380	cyanotype, fileprint, USNM047532.00	Shari 斜里	none	none	fig. I.1 Fitzhugh 1999
744	28830	cyanotype, USNM047495.00	Shari 斜里	pl. 29	CII	
745	28831	cyanotype, USNM047492.00	Shari 斜里	pl. 26	XCIX	
746	28833	cyanotype, USNM047491.00	Shari 斜里	pl. 25	XCVIII	

* concluded from Hitchcock 1891a/b and his manuscript or images of his photos

* は Hitchcock 1891a/b や手稿、または写真から判断したもの

表1 国立人類学アーカイブに収蔵されているR. ヒッチコックが1888年に北海道と色丹島で撮影した写真（続き）

Table 1. Photos by R. Hitchcock in Hokkaido and Shikotan in 1888, collection of National Anthropological Archives

Ref. No.	Neg No.	Collection No.	Locality	Hitchcock 1985	Hitchcock 1891a/b	Note
749	28379	cyanotype, USNM047481.00, USNM047482.00	Abashiri 網走	pl. 16	LXXXVII	plate used right side man 右人物のみ使用
757*	28825	cyanotype, fileprint=USNM047536.00	Abashiri 網走	none	none	
758*	28385	cyanotype, USNM047480.00	Abashiri 網走	pl. 13	LXXXVI	
759*	28377	cyanotype, fileprint=USNM047531.00	Abashiri 網走	none	none	fig. 19.2 Houchins 1999
760	28383	cyanotype, USNM047485.00, USNM047486.00	Abashiri 網走	pl. 18	XCI	
761*	28384	cyanotype	Abashiri 網走	none	none	
763*	28818	cyanotype, NAA INV 04509800	Abashiri 網走	none	none	
765	28817	cyanotype, fileprint=USNM047535.00	Abashiri 網走	none	none	same place of 28385 28385 と同一場所
766	28388	cyanotype, USNM047478.00, USNM047479.00	Abashiri 網走	pl. 11	LXXXIV	fig. 1.1 Arutiunov 1999
767*	28378	cyanotype, USNM047499.00	Abashiri 網走	pl. 32	CV	fig. 45.18 Kodama 1999
768*	28820	cyanotype	Abashiri 網走	none	none	
769*	28819	cyanotype, NAA INV 04509900	Abashiri 網走	none	none	
762*	28381	cyanotype, fileprint=USNM047534.00	Abashiri 網走	none	none	
764*	28382	cyanotype, USNM047500.00	Abashiri 網走	pl. 32	CV	
750*	28828	cyanotype	Tokoro 常呂	none	none	Original image of fig. 71 挿図7の元写真
751	28387	cyanotype, USNM047487.00	Tokoro 常呂	pl. 19	XCII	
752*	28375	cyanotype, fileprint, USNM047529.00	Tokoro 常呂	none	none	
753	28836	cyanotype, USNM047489.00, USNM047490.00	Tokoro 常呂	pl. 22	XCV	
754*	28386	cyanotype, fileprint=USNM047484.00	Tokoro 常呂	pl. 15	LXXXIX	
755*	28376	cyanotype, fileprint, USNM047530.00	Tokoro 常呂	none	none	same man of 28386 28386と同一人物
756*	28822	cyanotype, USNM047513.00	Tokoro 常呂	pl. 37	CX	

* concluded from Hitchcock 1891a/b and his manuscript or images of his photos

* は Hitchcock 1891a/b や手稿、または写真から判断したもの

時代の作業用と思われる。資料番号はなく、一部にネガ番号が記載されていた。silver gelatin/copy printは現在まで用いられている方式のプリントである。FILE PRINTという文字の形状の点孔が見られ、現在に至る整理や作業用のプリントと見られる。一部に資料番号が記されていた。halftone は報告書の切り抜きであったため複写しなかった。

以下、個々の写真について観察した事項を記載する。

・千島アイヌとロシア化

色丹島の官舎前で撮影された島民の集合写真（USNM052905.00 付録写真3）には、少な

くとも44名が認められ、内訳は男9人、女18人、子ども17人のようである。左端後列の男性は官吏かも知れない。拡大して観察すると、背筋を伸ばした立ち姿、洋服の着用、整えられた髪とひげ、右手を上には腰の前で組まれた手、そして右手の薬指や中指には指輪をしていることがわかる(図1)。正教会では結婚指輪は右手にはめ(ダヴィド・水口編2004: 117)、胸に手を組むときも右手を上にする(同: 159)。ランドー(1985: 172-175)が千島アイヌの服装や装身具について、女性はハンカチを首の周りや頭の後ろに結ぶこと、耳飾りをつけている者は非常に少ないと記載していることも一致する。中央の女性が抱えた楽器には糸巻きが3つ認められ(図2)、報告書の挿図3(35p)で示された収集資料と同一の可能性はある。報告書では不鮮明であった墓標については、少なくとも21柱が認められた。



図2 三弦楽器 Fig. 2
Three stringed instrument. USNMO52905.00

図1 色丹島の千島アイヌ
背筋を伸ばした立ち姿、洋服の着用、右を上にして組んだ手、右手に指輪が見える Fig.1 Kuril Ainu at

Shikotan Is. Stood straight with western clothes, a ring on the right finger put on the top of the left hand. USNMO52905.00 Photo lot 77-38, Romyn Hitchcock photographs of Ainu people, Japan, and Korea, National Anthropological Archives, Smithsonian Institution.

・刺青

報告書での刺青への言及は数ページあり、#28387(付録写真32)について「両唇のうえに狭い帯状をなしている」(同75p)、#28836(同34)で「水平な線と交叉線が交互する」(同pp.75-77)と記述しているが、「しかし、その青みがかった色のために、写真では肉眼で見えるほどはっきり現われていない」(75p)。不鮮明なのは英文報告書(Hitchcock 1891b)も同様である。これは荒い網点を用いた当時の印刷技術の限界を示している。一方、プリントでは図版19の上唇の刺青を観察することができる(図3上)。とりわけ図版22の左前腕は明らかで、手首から並走輪が4本、その上部は輪が腕外側で交差した模様が2つ認められる(図4)。並走輪が4本あるのは『アイヌ民族誌』に紹介された美幌の事例(児玉1969: 131-135)と共通するが、その上部の交差斜線は異なっており、むしろランドーの挿絵(ランドー1985: 188)の方に似ている。手の甲の状態は判読できなかった。

拡大してようやく判別できる程度の写りであるが、網走の女性2人のうち左の人物#28825(付録写真18)、斜里で撮影された#28838(付録写真12)の右に立つ2人の女性も上

唇の外側に幅の狭い刺青が見える（図3下）。網走の #28383（付録写真21）の左の女性は上唇だけに刺青が見える一方、右に立つ少女には見えない。



図3（左）入墨は上唇の周囲のみに見られる Fig. 3 (left) Tattoos are seen only around the upper lip . top: #28387 USNM047487.00, bottom left: #28825 USNM047536.00, bottom right: #28838 USNM047537.00

図4（右）左前腕の入墨は手首から並走輪が少なくとも4本確認でき、その上部は腕外側で交叉した模様が認められる Fig. 4 (right) At least four parallel lines were tattooed from the wrist on the left forearm, and crossing lines on the upper part. #28836 USNM047489.00 Photo lot 77-38, Romyn Hitchcock photographs of Ainu people, Japan, and Korea, National Anthropological Archives, Smithsonian Institution.

・服装

北海道のアイヌにも洋服の使用が認められる。斜里のアイヌ5人と和人1人の服装を詳しく観察すると、右端の和人と隣のアイヌ女性は上着の下にワイシャツのような襟とボタンがついた洋服を着用し、常呂の右の女性も同様のシャツを着ているように見える（図5、付録写真12, 32）。網走の女性2人は左の女性が前身頃上端の合わせを紐状のもので蝶結びにしており、洋服地かも知れない（#28825 付録写真18）。

#28838（付録写真12）は報告書の説明には記載されていないが、一番右に立つ女性の左下方に小さな手が見えており、子どもが1人写っている。女性は右手を子どもの右肩に載せており、男児と思われる顔の右半分が見えている。この男児は和装に見える。一方、#28382に写った男児は裸である（付録写真30）。

調査は8月であり、オホーツク沿岸とはいえ、夏場の服装にしては厚着をしていることが注目される。網走で偶然映り込んだ和人も夏にしては厚着に見える（付録写真26）。

・履物

写真に見えるアイヌの多くは裸足だが、一部に履物を身に付けた人物がいた。常呂で撮影された#28387（付録写真32）の右の女性は、ブドウ蔓で編んだようなわらじに見える履物を履いている（図6）。網走のアイヌのリーダーとされる人物の未刊行写真#28384は、高下駄を履く姿で写っている（付録写真22）。斜里のアイヌ5人のうち左端の男性は足指の位置や足首の紐状のものからおそらくわらじを、その隣の女性は白い鼻緒が目立つ和装用のようなぞうりを履いている。このほか、斜里の男性（付録写真13, 15, 16）、網走の老人（付録写真17）と女性（付録写真31）、常呂の老人（付録写真33, 35）と老女（付録写真34）なども、わらじ又はわらぞうりを履いて写っている。



左：図5 洋服を下着として着用している left: Fig. 5 Wore western clothes as under wear. #28838 USNMO47537.00 and #28387 USNMO47487.00

右：図6 ブドウ蔓で編んだわらじが見られる Right: Fig. 6 Put sandals made of wild grape vines. #28387 USNMO47487.00 Photo lot 77-38, Romyn Hitchcock photographs of Ainu people, Japan, and Korea, National Anthropological Archives, Smithsonian Institution.

・建物

別海で撮影された住居内部の写真 #28767 (付録写真11) には囲炉裏の左に夫婦と乳児の3人、右に母親と乳児の2人、さらに子どもなど4人、合わせて9人が写っている。服装は和服に見え、男性は麦わら帽子を被った短髪、女性は髪を上げて耳と額が見え、左の乳児は丸坊主である。服装や上方、そして容貌から、彼らはアイヌではなく和人と判断できる。ヒッチコックは別海について「一、二の純粋なアイノ家族がいるらしいが、しかし私は疑わしいように思う」(ヒッチコック1985: 101) と記している。別海のもう1枚の家屋外観写真 #28834 (付録写真10) で物置に右手を掛ける男性も、ひげがなく短髪であることから和人と判断できる。

別海の#28768 (図版27 ヒッチコック1985: 96) について、報告書では写真解説740に「一天幕様構築物が見える。その中には、一老婆と一匹の犬が寝ている様子が観察された」(ヒッチコック1985: 228) とあるが掲載写真では不明であった。一方、プリントでは、薪の左の円錐形のテントが明白である (図7)。



図7 整理番号740の家屋には、薪の左に円錐形のテントが見える Fig. 7 A corn shaped tent on the left of firewoods at the house with reference no. 740. #28768 USNMO47493.00 Photo lot 77-38, Romyn Hitchcock photographs of Ainu people, Japan, and Korea, National Anthropological Archives, Smithsonian Institution.

・集落

建物の作りからアイヌ集落に見える#28820 (付録写真27) は、整理番号768の解説「アイノ村落 [中略] 海岸に沿って家々はすべて海に面しているが、荒天の際波浪が寄せる線よりも充分後方に位置している」(ヒッチコック 1985: 230) と矛盾しない。右遠方の景色は網走北方の能取岬付近の山並みと似ている。明治中期の網走では、1886年(明治19)に網走市街のアイヌ家屋を東端の海浜に移し、アイヌ地と俗称した(田中 1971: 42, 256-259)。移転先は網走市南7条東6丁目付近である、網走のアイヌ集落で撮影された住居の写真は、背景の崖からその辺りの場所の風景と合致する (#28388 付録写真25)。よって、この写真は移転させられたアイヌ集落の姿で、家屋は新築や移築2年後のものだと判断される。

・網走市街地

板壁にガラス窓、石を載せた屋根から和人集落と判断できる#28818（整理番号763）は人物の影から東西の通りと判断できる。NAA収蔵のシアノタイプでは不明瞭だが、ウェブサイトの写真では画面左の看板は変体仮名の「はたごや」（＝旅館）と判読できる（図8 <http://sirismm.si.edu/naa/97/asia/04509800.jpg> 2014年12月22日閲覧）。講演原稿には「これは私が数日間泊まったホテルのそばの目抜き通りを撮影したものです」（矢口・出利葉 2009: 123）と記されており、家屋が連なる景観からは、当時から現在に至るまで中心市街地を形成している仲通（南4条通）の可能性が高い。明治26年12月現在の「網走村并付近実業人名」には旅人宿が3件掲載されており、住所はいずれも網走北見町中通三丁目または四丁目、現在の南4条通の西3または4丁目となっている（田中1971：55-57）。写真は、実際にヒッチコックが宿泊した旅人宿だったのかも知れない。



図8 網走市街地には「はたごや」の看板が見える

Fig. 8 Signboard "hatagoya" (hotel) on a street of Abashiri Town. #28818 NAA INV 04509800 Photo lot 77-38, Romyn Hitchcock photographs of Ainu people, Japan, and Korea, National Anthropological Archives, Smithsonian Institution.

・帽子岩

海岸に位置した特徴的な姿から帽子岩と判断できる#28819（付録写真28）は、網走川の河口付近にある帽子岩を背景にした、浜辺に和船が置かれた美しい景色を捉えている。左岸は帽子岩付近まで陸繋砂州 *tombolo* で馬が見える。撮影場所は帽子岩の角度から推定すると、網走川河畔の道の駅「流水街道網走」から200mほど東側と考えられる。現在の同地には防波堤が建築された人工的な姿で、隣接する海岸もやはり防波堤が立ち上がり、市街地からは海が見えない。しかし、かつては風光明媚な海岸が広がっていたことが伺える。

・その他

犬の飼育 色丹島での集合写真に左下の1頭（付録写真3）、網走での写真 #28384（同22）に白い犬が1頭、斜里での人物写真 #28838（同12）の左から3人目の女性の足元に黒い犬が1頭写っている。

櫛を通した髪 アイヌは髪に櫛を通すことは少ないと言われる一方、網走では櫛が収集されている（知里・米村1958: 1320）。斜里や網走で撮影された女性のうち年齢が若い人物は、髪を中央付近で左右に分け、櫛を通したような髪をしている（付録写真12, 18, 32）。

指輪 網走の女性にも指輪が認められる（付録写真18, 21, 30）。

考察

・旅程

旅行記に現れた地名は旅程順に、Betsukai/ Bekkai 本別海、Shibetsu 標津、Rubetsu 瑠辺斯、Shari 斜里、Abashiri 網走、Yambets 止別、Satsuru 札弦、Iyozan/ Iyosan 硫黄山、Tesikaga 弟子屈、Shibechia/ Shibichia 標茶、Akkeshi 厚岸、Kushiro 釧路、Wakorobetsu、Satsurigawa

雪裡川、Stakara mura 舌辛村、Shiranuka 白糠、Ohtsu 大津、Birofune、Biro 広尾、Horoidzumi 幌泉であった。漢字名称については英字表記から著者が推測したもので、下線は宿泊地を示している。旅行記に記載された日付を元に記述をたどると、別海発が8月15日、斜里着は8月17日と考えられた。

結果で述べた旅行記の日付、報告書の記述、ここでの考察から復元したヒッチコックの1888年8月の北海道東部での旅行経路と日程は、根室を8月9日に出港、その日のうちに色丹島で調査を行った後に択捉島に向かい同島沖で2泊し、帰路の11日に択捉島に上陸調査して根室に帰着（ヒッチコック1985: 26, 36-37）。その後、何らかの経路で本別海に到達、調査終了後の8月15日に標津に向け馬で出発、標津には1泊して翌16日に発ち、瑠辺斯駅通で宿泊、そして斜里には17日に着いた。その後、網走と常呂で調査の後、止別で1泊、川湯硫黄山に登り弟子屈から標茶、厚岸を經由して釧路、白糠、へと進み、十勝川沿いの大津に8月30日に到着し、9月1日に幌泉に向けて出発したと判断できる（図9）。



図9 報告書と旅行記から復元したヒッチコックの1888年8月の北海道での旅行経路。実線は報告書や旅行記に記載がある部分、点線は推定、黒丸は宿泊地 Fig. 9 Trip route of R. Hitchcock around Hokkaido in August 1888 based on his reports. Solid lines are the routes actually described in Hitchcock 1891a/b or “Descriptions on his travels in Yezo”, dotted lines are presumption, and closed circles are lodging site.

・撮影場所の特定

結果に記した写真の撮影場所の判断は、撮影地が明記されている場合はそれに従った。プリントに撮影地が不記載あるいは？マークが付けられた写真は、被写体を観察し、撮影

地が明記されている写真と同一の場所での撮影、あるいは同一人物が写っていることにより判断した。具体的には下の理由による。

#28378 人物左の建物と右後方の家屋が#28820の中央やや右の建物や家屋と一致する。

#28382 背景の建物や小屋根の上の植物が#28381や#28383と一致する。#28825も同一。

#28384 報告書の写真解説761（760と誤植）の記述と一致すること、さらに#28288の中央に写ること。

#28767 報告書の図版30（Plate CIII）の梁や柱、入口、画面左端の鍋と棚が一致する。

#28817 画面右端中央の柵とよりかかる丸太の形状が#28385と一致する。

#28818 結果の「網走市街地」で述べた。

#28819 画面中央に河口と砂州が写り、右端の岩の特徴が帽子岩で間違いないこと。

#28820 結果の「集落」で述べた。

#28828 報告書の挿図7（Fig. 71）の元画像と判断。画面中央右の小屋組が一致する。

#28838 左端の男性と左から3番目の女性が#28380の人物と一致する。

なお、#28830は、画面左端の山は斜里岳西方の江鳶山に似ており、手前に砂丘の連なりから、斜里川河口左岸のクシタ（クシュンコタン）かも知れない。

・挿図の元となった写真

上述のとおり、別海のアイヌ家屋の内部を描いた Plate CIII 挿図30 は、画面中央の柱と梁、入口、画面左の棚や鍋の形状が一致することから、マグネシウムを焚いて撮影された#28767（付録写真11）を元に描かれたと判断している。写真は全体に暗くマグネシウムの火花が映り込んだこと、和人の家族が写っていることから、写真ではなく挿図とし、アイヌの翁を配置したものと想像される。なお、挿図は上部の屋根裏部分が遠近法から外れた描き方になっている。

常呂の家屋の小屋組みの図71は、その形状から#28828（付録写真31）を元に描かれたものと判断している。描かれた建物には、屋根や壁が初めからなかったのである。

おわりに

ヒッチコックが明治中期の1888年に撮影した写真は、北海道東部のアイヌの姿を撮影した当時唯一の写真として評価されてきた。しかしながら、報告書に掲載された写真は、残念ながら印刷技術の限界から不鮮明なものであり、十分な品質を持たなかった。そのため、ヒッチコックの観察結果は、おもに文章記録から理解されてきた。これに対して、オリジナルプリントやそのデジタル複写のイメージからは、ヒッチコックの観察内容を視覚イメージとして追体験することが一定程度可能になった。写し取られた対象に関する専門の研究者が写真を観察すれば、たとえば住居や建築、服飾技術などについて多くの事実を読み取ることが可能と考える。

次の課題として、より詳細なイメージを追求するため、ガラスネガ（ガラス乾板）からのデジタルデータの作成が考えられる。ネガの画像は階調に優れており、より詳細な観察が可能である。講演会に用いたランタンスライドが存在したことは確実で、この資料も見つけ出したい。ランタンスライドは着色写真の可能性もある。加えて、網走を初めとする調査地部分を記録した旅行記の検索が重要である。もし見つければ、報告書の内容をより深く理解し、また、撮影場所や被写体の特定ができるかも知れない。

明治以降のアイヌについては、伝承文化の強制的な放棄、あるいは日本文化への同化といった集団全体に向けた視点で語られることが多く、個人レベルの変化に着目した論考は少なかった。ヒッチコックの写真に写ったアイヌの人たちは、洋服の着用、若い女性の櫛をとおした髪や指輪、千島アイヌでは姿勢や指輪といった服装や装身具などが観察され、彼の写真は、これら十分に文章化されてこなかった事実を研究する素材としても有効だろう。

さらにヒッチコックの写真や旅行記は、北海道東部の開発の記録としても貴重な資料である。旅行記では駅通や道路の状況、林業の様子、宿や宿泊者の描写などもあり、翻刻と和訳は北海道史に新たな視点を加えることが可能と考える。

謝辞

本論を作成するにあたりスミソニアン協会国立人類学アーカイブ National Anthropological Archives, Smithsonian Institution, および職員の Adam Minakowski, Gina Rappaport, Sarah Ganderup, Daisy Njoku の4氏、コーネル大学附属図書館稀覯書手稿室 Division of Rare and Manuscript Collections, Kroch Library, Cornell University, および職員の Hilary Dorsch Wong 氏にはたいへんお世話になりました。また、網走市立郷土博物館の米村衛館長、斜里町立知床博物館の松田功学芸係長には撮影場所についてご教示をいただきました。お礼申し上げます。

なお、掲載した写真には現代から見ると不適切な部分がありますが、資料の重要性と一覽性から収録したことを付記します。

引用文献

Arutiunov, S.

1999 "Ainu Origin Theories", in Fitzhugh, W. and Dubreuil, C. (eds.) 1999, pp.29-31
知里真志保・米村喜男衛

1958 「アイヌ土俗品解説」網走市史編纂委員会『網走市史上巻』網走市
ダヴィド・水口優明 編

2013 『正教会の手引（改訂版）』日本ハリストス正教会教団全国宣教委員会
<http://www.orthodoxjapan.jp/pdf/new-tebiki.pdf>

Fitzhugh, W.

1999 "Ainu Ethnicity: A History", in Fitzhugh, W. and Dubreuil, C. (eds.) 1999, pp.9-26

Fitzhugh, W. and Dubreuil, C. (eds.)

1999 *Ainu: Spirit of a Northern People*. Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution. Washington D.C., 415pp.

Hitchcock, R.

1891a "The Ancient Pit-dwellers of Yezo". *Report of the U. S. National Museum for the Year Ending June 30, 1890*: 417-427

1891b "The Ainos of Yezo, Japan". *Report of the U. S. National Museum for the Year Ending June 30, 1890*: 429-502

ヒッチコック, R. (北構保男 訳)

1985 『アイヌ人とその文化—明治中期のアイヌの村から—世界の民族誌 1』六興出版

Houchins, C.

1999 "Romyn Hitchcock and Smithsonian Ainu Collection", in Fitzhugh, W. and Dubreuil, C. (eds.) 1999, pp.148-154

Kodama, M.

1999 "Clothing and Ornamentation", in Fitzhugh, W. and Dubreuil, C. (eds.) 1999, pp.313-326

児玉作左衛門

1969 「アイヌの文身」アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌（上巻）』131-135, 第一法規